

E-1 家島の住居とそのすみ方(その2) 一家族型、間取りと住行為の関連  
姫路短大 ○衣畑悦子 大阪女子短大 末政清子

目的 前報では、瀬戸内海リ離島、家島について、主として、家族構成型、住居に対する満足度、住要求、増改築傾向について報告した。今回は、家族構成員とその家の「住み手」とし、間取りを「住空間」として具体的にとりえ、部屋数別、間取り別、家族構成別にすみ方を考察した。

方法 前報と同様、昭和49年7月に、各戸訪問により聞き取り調査を行い(29戸)のち、平岡園(157戸)を採集した。それらと重ねて聞きと、た。

結果 家族の型別からすみ方をみると、1)核家族の場合、古帯主母令の若し20、30代は、全員が、2階で寝る場合が多く、40、50代では、就寝分離が行われて、1階は天婦、2階は子どもとなり、また、勉強の行為も含めれる。2)複合家族の場合、老夫婦が1階、若夫婦が2階で就寝している。3)傍系複合の場合、やはり老夫婦は、すべて1階で就寝し、若夫婦は、子どもと2階を使っているが、傍系家族員も2階を使用することが多く、彼らが、就職、結婚で出て行くとその寝室は、子どもの勉強に転用している。以上は、就寝を主として取り上げたが、一般的に1階は、家族の中心者が占める観念がある。傍系家族が出ていく、老夫婦の片方がいなくなるなどの変化は、すみ方が、次の世代へ移行していく要因として大きく考えられる。このことは、これからの住空間と家族構成とのか、ちを考へるのに重要な点である。また、他の行為、困らん、接客傾向についても、間取り、へや数などの関係がある。